唐代伝奇「陸顒伝」に関する一考察（下）

増　子　和　男

前言

唐代伝奇「陸顒伝」について論考を試みた小論も、本稿を併せると四編となった。[1] 当初は、上・下二編で完結する予定であったこの小品に、予想もしなかった様々な問題が潜んでいたためである。

見る角度を変えれば、更に考えるべき問題も出て来る可能性も否定できないが、この辺りで、現段階で見出された事柄を整理して、一つの区切りとしたい。

＊　＊

落第書生・陸顒は、いくら麺を食べても腹が一杯にならず、むしろ痩せてしまうと言う特異体質の持ち主。ある日、胡人が彼のもとを訪れ、その腹中にあって麺大食の原因となっている「消麺虫」と言う奇虫を破格の値で買い取って行く。

これを元手に都に園林を買って自適の生活をする陸顒のもとを、先の胡人が再訪し、海中世界へと彼を誘う。その誘いに乗った彼は、胡人と共に南海に赴く。胡人は、消麺虫を使い、海中の「至宝」を手に入れ、それを口に含んで海中世界に入って行く。陸顒は、胡人に従い、竜宮や蛟室に行き、夥しい宝を得る。分け前としてその一部を受け取った陸顒は都へ戻るのをやめ、閩越（今日の福建省付近）で一生を終えた。

一

この話は、石田幹之助『長安の春』に紹介されて以来、我が国においても説話学や民話学、さらには史学などの著作や論文、随筆に少なからず引用されてきたが、そのあまりに荒唐無稽と言って良い内容も手伝ってか、これまで一個の作品として論じられることが殆ど無かった。

そこで、本作品中に見出される用語を手がかりとして考えたのが、この一連の論考であった。

これまでの考察の要点を整理すると以下のようになる。

① 登場する胡人について、作品中自らを「南越（広東、広西地域）に生ず」とあることを以て直ちに東南アジア系であるとする説があるのに対して、[2]

ア　作品中に、「海を航し、山を梯して、中華に来たり云々」

とあること。

イ　この話の舞台となった南越地域には、西域地方の人々が少なからず居住していたことが知られていること。

ウ　石田幹之助氏が、「胡人採宝譚（さいほうたん）」と名付けた本作品を含む一連の類話で、「胡人」とある大多数が、西域地方の人を指すこと。[3]

等から、ここに言う胡人とは、狭義の胡人を指す粟特人（ソグド）Sogdianまたは、大食（タージ）と呼ばれたアラビア人などをまず第一に想起すべきである。

②　「陸顒伝」以外の志怪、伝奇の類にも、「陸顒伝」と同じく、胡人の宝に寄せる飽くなき執念とそれを見出す事の出来る不思議な霊力が語られるものが少なくない。このうち、「陸顒伝」と同じく宝珠を宝とするものが大部分を占める。さらに、その類話を検討すると、宝珠を単なる宝としてではなく、何らかの特別な力があるとする一群の類話が浮かび上がり、陸顒伝と酷似した話が見出される。これらの話が、それぞれ偶然に出来上がったと考えることは極めて困難であり、何らかの関連性を認めてしかるべきである。

③　消麵虫と同じく、

ア　腹中にあると、いくらでも飲食できてしまう。

イ　富と関わりを持つ。

と言う虫を志怪、伝奇の類に求めると、その姿こそ消麵虫のように「青い蛙のような姿」ではないものの、ア、イの何れか乃至は、両方の特徴を持った例を見出すことが出来る（以上、上編）。

④　話の舞台となった「南海」を唐代の人々がどの辺りと考えたかについて、当時の人々の発想を知る手がかりとして、最もポピュラーな文学形態と思われる詩の用例を中心に検討した。その結果、「陸顒伝」に言う南海とは、南シナ海沿岸―とりわけ、唐代の行政区分で言うところの嶺南道周辺の沿岸部であろうと考察した。

⑤　その南海に陸顒が赴き、「至宝」を得た胡人とともに出かけたのが、海中世界の竜宮、蛟室であった。このうち、蛟室については、従来注釈書などで解釈の分かれるところであったので、『文選』をはじめとする先行乃至は同時代の詩文の用例から、蛟人―水中にすむ人魚のようなもの―の室であろうと考証した。そこには、蛟人の流す涙から出来たとされる真珠と、彼らの織りなす高価な絹織物である蛟綃紗が満ち満ちていると考えられていた。[4]

この二つの用語の検討を通じて、唐代の人々は、話の舞台となった南海と言うものにロマンチシズムを感ずると同時に、富をもたらす所と言うイメージを持っていたことが見て取れる（以上、中編）。

⑥　消麵虫の形状すなわち「青い蛙のような形」の来源を検討するために、本作品の舞台となったと思われる、唐代に言うところの嶺南道に関する考古学、民俗学方面の研究報告や資料、さらには当地の状況を記した歴代の筆記を再度調査した。その結果、南中国一帯に古代から現代に至るまで広く行われた農業神としての青蛙信仰を踏まえている可能性が高いことが判明した。

これらの地域のうち、本作品の舞台となったと考えられる嶺南道の境域に古くから居住する壮族では、この蛙、特に青蛙信仰が

古代より今日に至るまで行われている。こうしたことから、本作品が多分に意識したのは、この壮族の青蛙信仰であったと考えられる。

こうした青蛙信仰を作者が知ることになったのは、作者自身が嶺南道に赴いた可能性もあろうが、何らかの形で当地を訪れたことのある人から直接または間接的に伝え聞いた可能性も十分考えられる。何となれば、唐代、当地を訪れた知識人が少なくなかったからである（以上、「消麺虫来源小考」[3]）。

＊　＊

以上のことから、本作品も他の伝奇の多くがそうであったように、先行する詩文や志怪、伝奇に見える事柄を組み合わせて話を作り上げていると見ることが出来よう。これは、あたかも寄せ木細工のような様相を呈していると言って良い。

角度を変えて言えば、確かに荒唐無稽に思われるこの話に見える事柄も、多くの場合は、作者その人の純然たる創作ではなく、先行の詩文、とりわけ志怪、伝奇の類に来源を求めることが出来ると言うことになる。そうして、作者の手腕は、先行する話やその中に出てきた諸々の事柄を、いかにうまくつなぎ合わせて、自分の話に仕立てるかと言う点にあるように思われる。

こうした傾向は、程度に差こそあれ、典拠を重視する中国古典詩の世界と通底するものであり、さらには、何事に対しても「実事」を重視し、要求する傾向の顕著である彼らの姿勢の現れと言って良い。[6]

このように考えると、本作品の主人公・陸顒が、科挙を目指す書生であるという設定、そして結局はその志を棄て、一市民として一生を終えると言う結末もまた、沈既済の作と伝えられる「枕中記」（『太平広記』〔以後は『広記』と表記〕巻八二）を始めとする一連の作品に同じと言える。

そうであれば、主人公である陸顒と言う名前も、あるいは何らかの典拠を求めるべきであろうか。

二

作品中、陸顒を呉郡の人とする。呉郡は、唐代の行政区分で言えば江南道に属し、今日の江蘇省蘇州市周辺。江南の陸氏と言えば、朱、張、顧氏と並んで、世族（代々官吏を輩出した家柄）の一つに数えられる。[7] 主人公を、隴西の李氏―帝室と同じ出身地の同姓―を始めとする名家の子弟と設定するのは、唐代伝奇の常道を踏まえると言って良い。

名の顒はどうか。

唐代迄の正史を見渡すと、益州（今日の四川省）の非漢族の乱を収めたので知られる李顒（『後漢書』巻八「霊帝紀」）を始め、約十二名の人々の名が見える。[8] しかしながら、こうした実在の人物たちの事跡と、この物語の主人公を結びつける事柄は見出し得ない。

では、「顒」字の語義から手がかりを得られないであろうか。

現行の辞書類を参考にすると、顒の語義は、おおよそ次の三点に分けることが出来るようである。[9]

① 大きい頭、転じて大きい様子。

『詩経』小雅「六月」に、

○四牡脩広　四牡　脩広
其大有顒　其の大なること　顒たるあり

とあり、その「毛伝」に、「脩とは、長きなり。顒とは、大なる貌なり。」と見え、後漢・許慎『説文』に、

○顒とは、大なる頭也。

と説明される。

② 慎むさま。

『周易』巻三「歓」に、

○有孚顒若　孚たる有りて、顒若たり

とあるのに対して、「疏」では、

○顒とは、是れ厳正の貌なり。

と説明される。

③ 仰ぎ慕う。

西晋・劉琨「勧進表」（『文選』巻三七）に、

○蒼生顒然　蒼生　顒然たり
莫不欣戴　欣戴せざるは莫し

とあるのに対して、李善注では、『淮南子』巻二「俶真訓」を引いて、

○聖人は、陰陽の気を呼吸して群生　顒顒然（仰ぎ慕うさま）として、その徳を仰ぎて和順せざるは莫し。

と説明される。[10]

さらに、以上の意味から派生した熟語としては、

A　顒顒（温和で敬順な様子[11]）
B　顒若（厳かな様子[12]）
C　顒然（仰ぐ様子[13]）
D　顒望（ふり仰ぐ様子[14]）

などがある。

これらの意味を踏まえた上で、姓の陸とあわせ見ると、

① 陸の大なる（様）。
② 陸の厳かなる（様）。

③　陸にて（海を？）仰ぎ慕う。

などが連想されるのであるが、こうした要素が踏まえられている可能性は否定しないものの、そのいずれもが、主人公の命名と直接結びつくものとは思われない。

ここで最も注目すべき記述が、『山海経』に見える。

○　また東のかた四百里を令丘の山と曰ふ。草木無く、火多し。其の南に谷あり。中谷と曰ふ。条風（東北の風）是より出づ。鳥あり。其の状は、梟の如く、人面四目にして、耳有り。其の名を顒と曰ふ。其の鳴くや自ら叫ぶなり。見るれば則ち、天下に大旱あり（「南山経」第一）[15]。

「梟のような姿で、人に似た顔に四つの目で、耳を持つ。その名を顒という。鳴き声は、自分の名を呼ぶようである。その鳥が出現すると、天下に大旱魃が起こる。」―問題となるのは、その怪異と言って良い姿形ではなく、この鳥が出現すると旱魃が起こるという記述である。

既に「付説」において考証したように、消麵虫の「青い蛙のような形」は、中国とりわけ唐代、嶺南道に属した境域で古代より今日に至るまで連綿と続く青蛙信仰と密接な関係を有しているものと考えられた。

現代の民俗学者の共通した見解として、蛙とりわけ青蛙は、

①　雷と関連する（民話では、雷神の子女、あるいは使者とされる）。

②　降雨と関連する（蛙が鳴くのを、祈雨、すなわち降雨を祈っていると見る）。

③　蛙が、害虫を駆除してくれる。

と考えたために、農業神として祭られてきたとされる[16]。このうち特に重要なのは、②の蛙が降雨と深く関連していると考えられていたという指摘であろう。

この降雨と密接な関連を有すると考えられた「青蛙神」を思わせる消麵虫を腹中に持つ落第書生の名が、旱魃を招く怪鳥の名を持つのは、偶然とは見なし難い。牛僧孺の選と伝えられる『玄怪録』所収の「元無有」（『広記』巻三六九）なる物語の主人公の名―元より有ること無し―等の例に明らかなように、伝奇の登場人物の命名には、しばしばこうした、いわば遊び心とでも言うべきものが潜んでいるからである[17]。

降雨と旱魃と言う二つの相反するものを―例えば陰と陽とのように―「対」と見なしてセットで考えるのが、この国の伝統であった。そうであるなら、右の指摘も、あながち的外れとは言えないのではないか。

三

それでは、以上のような傾向の顕著な「陸顒伝」に、仮にテーマ

を求めるとしたら、どのようなものであると考えられるであろうか。

ところが、何度この物語を読み返し、様々な角度から検討を加えても、いっこうにそれらしきものは浮かんでこない。更に言えば、テーマはおろか、その作品中から何らかの主張なりメッセージなりを読みとることすら非常な困難を伴う。むしろ作者には、そうした意識が、そもそも存在しないのではないかと考えた方が実態にかなっているようにさえ思われるのである。

＊　＊

富永一登「唐代小説の創作意図」では、唐代小説の傑作の一つである「杜子春伝」が、「李娃（あい）伝」「鶯鶯（おうおう）伝」などとは異なり、作者自身がテーマを記していない大多数の作品群の一つの傾向を知る上での重要な手がかりになるとして考察を加え、こうした作品群は、ある特定のテーマを持って書かれたものでもなく、或いは作者の人生観を反映したものでもないとする。そして、作家たちの眼目は、類話をつなぎ合わせ、いかに「奇」なる展開、描写によって、読者を驚かせ、楽しませるかという諧謔性にあり、作家たちの知的エネルギーの発散の場こそが、唐代小説であったと見る。[18]

先に述べたように、「陸顒伝」も、富永氏の言われるところの「作者自身がテーマを記していない」作品群に含まれる。しかも、既に見てきたように、その特徴とするところもまた、右に引いた同氏の指摘とほとんど一致する。

良く知られているように、唐代伝奇は、沈既済「任氏伝」（『広記』巻四五二）や李公佐「南柯太守伝」（『広記』巻四七五）、或いはまた陳鴻「長恨（歌）伝」（『広記』巻四八六）などの著名な作品の中で作者自身が明記する通り、旅中や行楽、酒宴の席上で語られたものを文章化したものである場合が少なくない。こうした場に居合わせた人々の全てが、考えや利害関係を共有するとは限らない状況の下、内容によっては自分だけではなく、周囲の人々の地位や財産、場合によっては生命をも失いかねない政治向きの話題などは、極力避けねばならなかったであろうし、それが文字通りの「閑談」であってみれば、その場限りの慰藉や娯楽的要素のある話が好んで語られたであろう事は想像に難くない。

既に触れたように、「陸顒伝」の主要舞台は単に「南海」と記されてはいるが、唐代の行政区分で言う嶺南道に属する境域であると考えられた。この地は、当時の知識人たちが、様々な形―左遷、流謫、或いは栄転等々―で出かけた所であった。国都・長安の位置する内陸西北方の乾燥した風土とは全く異なる当地の風物のあれこれは、「奇を好む」当時の知識人の耳目をひき、前記した「場」で語られた伝奇の格好の材料を提供したことであろう。作者が目指したのは、あくまでも聞き手（読者）の興味を引きつけることにあり、特定のテーマや作者の人生観の披瀝などは、むしろこの際は不要である。

「陸顒伝」こそは、まさしく特定のテーマを持って書かれたものでも、作者の人生観を披瀝したものでもなく、先行の類話を巧みに取り込みつつ、作者が「奇」なる展開、描写によって読者を驚かせ、楽しませる事にのみ主眼をおいて創作した作品の典型と見なしてしかるべきものと思われる。

しかし、ここでどうしても割り切れない疑問が残る。「杜子春伝」をはじめとする、富永氏の言われるところの、「作者自身がテーマを記していない大多数の作品群」の全てが、果たしてこの「陸顒伝」と同じ性質を持つものであるかどうか。更に、作者自身がテーマを記したと言われる作品のテーマを、そこに書かれている通りに受け取って良いか否か。今日的視点でこれを見るのではなく、当時の人々の視点に立つという、氏の説かれたような姿勢で、もう一度これらの作品を見直す必要があるように思われてならない。これについては、今後、少しく時間をかけて考えてみることとしたい。

[注]

(1) 「唐代伝奇『陸顒伝』に関する一考察（上）」、「同（中）」、「同—消麵虫来源小考」（何れも、『日本文学研究』第三三号から第三五号にかけて連載、一九九八～二〇〇〇年）。更に、これと関連した論考「鮫人泣珠考」（『村山吉廣教授古稀記念中国学論集』汲古書院、二〇〇〇年所収）を併せると、五編となる。

(2) 荘司格一『中国中世の説話』（白帝社、一九九二年）など。

(3) 石田幹之助『長安の春』（初出は、創元社、一九四一年。平凡社東洋文庫所収、一九六七年）。

(4) 蛟（鮫）人の来源については、本稿注1に示した「鮫人泣珠考」で詳しく論じているので、こちらを参照されたい。

(5) 以後、本稿は、「付説」と称する。

(6) こうした彼らの、何事に対しても実事を求める姿勢については、増子が、かつて「欧陽脩の文学論における『理』」（『中国詩文論叢』第二集、中国詩文研究会、一九八三年）をはじめとする幾編かの論考で考察した。

(7) 今村与志雄『唐宋伝奇集』下（岩波文庫、岩波書店、一九八八年）参照。

(8) 何顒（『後漢書』巻六七「党錮列伝」）、邢顒（『三国志』魏書巻一二「邢顒」）、趙顒、楊顒（『三国志』蜀書巻三二「先主備」）、東晋・李顒（『隋書』巻三二「経籍志」）、司馬顒（『晋書』巻五九「河間王顒」）、戴顒（『宋書』巻九三「隠逸伝」）、鄧長顒（『北斉書』巻四四「儒林伝」張景仁）、周顒（『南史』巻三四「周朗、族孫顒伝」）、郄顒（『南史』巻七三「孝義上」孫棘妻許氏、徐元妻許氏錢延慶）、孫顒（『新唐書』巻一九五「李知本伝」）、張季顒（『新唐書』巻一一六「吐蕃伝・下」）など。

(9) 『大漢和辞典』（修訂版、大修館書店、一九八六年）、『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、一九九〇年）、『漢語大字典』（縮印本、四川辞書出版社・湖北辞書出版社、一九九三年）、『辞海』（一九七九年版、上海辞書出版社）、『辞源』（修訂版、商務印書館、一九七九年）、『国語辞典』（オンライン版、URL:http://www.edu.tw/clc/dict/）など。

(10) 『淮南子』の現行テキストでは、「顒顒然」に作る。同義。

(11) 顒顒卬卬、如圭如璋（『毛詩』大雅「卷阿」）顒顒、卬卬、君之徳也（『爾雅』釈訓）、『史記』～『新旧唐書』に、「兆民顒顒、咸注嘉願（『三国志』「魏書」巻二「文帝丕」）と見える

ほか、一八例、『文選』に「顒顒卬卬、椐椐彊彊（巻三四枚乗「七発」八首其七）とあるほか、『全唐詩』（以下、『全』と表記）に、「肅肅享祀，顒顒纓弁（巻一二　郊廟歌辞「享先農楽章・肅和」）」とあるほか三例。

(12) ①の『周易』の用例の他、『史記』～『新旧唐書』に、「昭事顒若、存存以俱」（『旧唐書』巻三〇「音樂志」三）とあるほか一例。『全』に、「昭事顒若，存存以俱」（巻一〇　郊廟歌辞「明皇祀圜丘楽章・肅和」）ほか一例。

(13) 本文③の西晋・劉琨「勧進表」の用例の他、『淮南子』（巻二「俶真訓」）の現行のテキスト、『史記』～『新旧唐書』に「今万姓顒然、聞一善令、莫不途歌里頌、延頸向風、欣然慕化。」（『旧唐書』巻一百八三、「韋温伝」）とあるほか一例。『全』に、「聖道本自我、凡情徒顒然。」（巻三五四　劉禹錫「華清詞」）とあるほか一例。

(14) 『全』に、「顒望臨碧空，怨情感離別。」（巻一八一　李白「望夫山」ただし、巻四七二では、同作品を、李赤「姑熟雑詠望夫山」としている）とある。

(15) 西晋・郭璞は、「顒」字に対して、「音は娛（ご）」と注するが、ここで問題となるのは、音よりも文字そのものであろう。

(16) 丘振声『壮族図騰考』（広西教育出版社、一九九六年）など。説に関する詳細は、「付説」七七頁を参照されたい。

(17) この他にも、薛漁子選という『河東記』所収の「蕭洞元」（『広記』巻四四）の登場人物の名、終無為は、「終（つい）に為すこと無し」である。

顒（『山海経図』より）

また、我が国でも良く知られる「杜子春伝」の主人公の名も、北朝・周から隋にかけて実在した学者杜子春の名と共に、その音から肚子蠢―心が動く、揺れ動く意―を連想させ、さらには、唐の十一代皇帝・憲宗の名である李純（杜を析字すれば、木＋土となり、その一部木＋子で李。純と春とが同音。合わせれば、李純）をも連想させうるとの指摘もある（成瀬哲生「鉄柱を削る道士」（『竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢』所収、汲古書院、一九九一年）。

なお、唐代伝奇における「遊び心」については、後述する。

(18) 松本肇・川合康三編『中唐文学の視角』（創文社、一九九八年）所収。なお、文学における「奇」の問題については、加藤国安「杜甫の表現行為における『奇』」（『中唐文学の視角』所収）、

川合康三「奇――中唐における文学言語の規範の逸脱」（『終南山の変容』所収、研文出版、一九九九年。初出は『東北大学文学部研究年報』三〇〔一九八一年〕）などに詳しい。

増子も、岑参詩の「奇」について、「理」との関わりを手がかりに考察を試みた事がある（「岑参詩に対する評語『奇』の解釈をめぐって」〔『中国詩文論叢』第六集、一九八七年〕）。